

【統計一口メモ 第39話】

＜最小二乗平均とは？＞

名古屋市立大学大学院医学研究科 非常勤講師 薬学博士 松本一彦

ある治療薬の添付文書に「最小二乗平均 (least square means, LSM) とその 95% 信頼区間」が載っていました。基礎研究の毒性家には、ほとんど目にする事のない用語です。でも、一般人も目にする添付文書に載っているこの用語の意味を知っておかねば一です。

表1 12週時の1日平均排尿回数の変化量

投与群	症例数	投与前	変化量 [#]	プラセボ群との比較 ^{##}
プラセボ群	369	11.20 ± 2.40	-1.21 (-1.40, -1.03)	-
A剤50mg群	370	11.13 ± 2.37	-2.08 (-2.27, -1.89)	p < 0.0001
A剤100mg群	368	11.08 ± 2.25	-2.03 (-2.22, -1.84)	p < 0.0001
平均値 ± 標準偏差				
#最小二乗平均値 (95% 信頼区間)				
##有意水準両側5%				

§ 1. 算術平均と最小二乗平均の違い

“通常の平均値”は線形モデル $y = aX + b$ の a が 0 のとき、すなわち傾きがないときに最小二乗法を用いてパラメータである b で計算します。一方、“最小二乗平均”の場合は経時変化のように、投与前を X としたとき、すなわち $a \neq 0$ のときに用います。したがって、表1のようなプラセボ群と2つの投与群で変化量の違いを求める場合、線形モデルとして3本の平行な回帰直線の間隔を比較することになります。すなわち、経時変化のあるデータでは傾きのない3群の平均値の比較と比べて、傾きを考慮して比較をする方が正しい解析といえます。

それでは、2群比較の例題を使って「最小二乗平均とその95%信頼区間の求め方」を見ていきましょう。ただ、計算には通常みかけない行列式がふんだんに使われています。実際には、エクセル関数 (MMULT、TRANSPOSE、MINVERSE) で処理できるので、行列式の詳しいことを知らなくても計算することができるのですが、じっくり取り組んでみたい方は、高橋行雄「最尤法によるポアソン回帰分析入門」¹⁾を参照してください。

§ 2. 最小二乗平均を求める

表2. 薬剤Aと薬剤Bの投与前後の血圧値

例題：血圧降下剤AとBの拡張期血圧を投与前と投与1週間後の変化量を調べた。両群の最小二乗平均と95%信頼区間を求め、差を検定したい。

例題として2群比較をとりあげます。最小二乗平均の求め方と従来行われている前後値の2群比較との違いを見てみましょう。

薬剤A		薬剤B	
前値	後値	前値	後値
148	158	184	197
144	152	166	157
146	160	139	127
163	174	158	150
159	160	148	135
157	167	174	176
155	151	151	145
165	161	167	180
177	169	165	155
156	160	154	148

表3. 最小二乗平均計算原表

		デザイン行列				
	X_0	a	前値 X	後値 Y	差 D	推定値 D^{\wedge}
	1	0	148	158	10	2.8
	1	0	144	152	8	2.1
	1	0	146	160	14	2.4
	1	0	163	174	11	5.2
薬剤A	1	0	159	160	1	4.5
	1	0	157	167	10	4.2
	1	0	155	151	-4	3.9
	1	0	165	161	-4	5.5
	1	0	177	169	-8	7.4
	1	0	156	160	4	4.0
	1	1	184	197	13	0.1
	1	1	166	157	-9	-2.7
	1	1	139	127	-12	-7.1
	1	1	158	150	-8	-4.0
	1	1	148	135	-13	-5.6
薬剤B	1	1	174	176	2	-1.5
	1	1	151	145	-6	-5.1
	1	1	167	180	13	-2.6
	1	1	165	155	-10	-2.9
	1	1	154	148	-6	-4.7
	1	0	158.80	←2群前値平均		4.5
薬剤A	平均 μ^{\wedge}_1		157.0	161.2	4.2	最小2乗平均
	SD σ^{\wedge}_1		9.9	7.2	7.6	
	1	1	158.80	←2群前値平均		-3.89
薬剤B	平均 μ^{\wedge}_2		160.6	157.0	-3.6	最小2乗平均
	SD σ^{\wedge}_2		13.3	21.5	9.7	
平均の差	$\mu^{\wedge}_2 - \mu^{\wedge}_1$		3.60	-4.20	-7.80	-8.38
	差のSE		5.23	7.16	3.89	3.96
	t値		0.688	-0.587	-2.007	-2.117
	両側p値		0.500	0.565	0.060	0.0493

Dbar	Di-Dbar	D^{\wedge}	$D^{\wedge}-Dbar$	$D-D^{\wedge}$
4.2	5.8	2.8	-1.4	7.2
4.2	3.8	2.1	-2.1	5.9
4.2	9.8	2.4	-1.8	11.6
4.2	6.8	5.2	1.0	5.8
4.2	-3.2	4.5	0.3	-3.5
4.2	5.8	4.2	0.0	5.8
4.2	-8.2	3.9	-0.3	-7.9
4.2	-8.2	5.5	1.3	-9.5
4.2	-12.2	7.4	3.2	-15.4
4.2	-0.2	4.0	-0.2	0.0
-3.6	16.6	0.1	3.7	12.9
-3.6	-5.4	-2.7	0.9	-6.3
-3.6	-8.4	-7.1	-3.5	-4.9
-3.6	-4.4	-4.0	-0.4	-4.0
-3.6	-9.4	-5.6	-2.0	-7.4
-3.6	5.6	-1.5	2.1	3.5
-3.6	-2.4	-5.1	-1.5	-0.9
-3.6	16.6	-2.6	1.0	15.6
-3.6	-6.4	-2.9	0.7	-7.1
-3.6	-2.4	-4.7	-1.1	-1.3
	1360.00		63.18	1296.82
	ST		SR	Se
自由度	19		2	17

表3はこれから求める最小二乗平均の計算に必要な項目とその結果です。

ここでは、両群のデータから“後値Y”の2群平均値の差では有意差はみられず(P=0.565) “前後差D”ではp値がp=0.060と棄却限界値(0.05)に近い値を示している例をとりあげています。前値を共変量とする最小二乗平均を用いた2群の差の検定ではp=0.0493となっていますが、どのようにして求めたのかを見てみましょう。

最小二乗平均は、デザイン行列と係数(β^{\wedge})の行列から求めます。それぞれの求め方をひも解いていきましょう。デザイン行列はここでは「最小二乗平均算出のための行列X」を意味します。

表4

		AK	AL	AM	AN
		最小二乗平均算出のための行列X			
		X_0	a	X値2群総平均	係数(β^{\wedge})
9	薬剤A	1	0	158.8	-20.939
10	薬剤B	1	1	158.8	-8.376
11					0.160

MMULT(Xの範囲、係数の範囲=MMULT(AK9:AM9,AN9:AN11))

このような行列関数MMULTによる計算から
表5のような、最小二乗値を求めることができますが、

表5

	最小二乗平均
薬剤A	4.49
薬剤B	-3.89

問題は“行列 X”と“係数(β̂)”行列の求め方です。
 それでは、ひとつずつ手順を追ってみましょう。

手順1. “投与前値の2群総平均”とした2群の行列 X を作成する

群名	x ₀	a	X値2群総平均
薬剤A=	1	0	158.8
薬剤B=	1	1	158.8

x₀に1, aに1と0を配置します。これをダミー変数と呼びます。

今回は薬剤 A を1, 0 薬剤Bを1, 1としました。その横に「前値 X の2群をまとめた総平均値」を配置します。これを“行列 X”と呼びます。

手順2. 係数(β̂)行列を作成する

係数(β̂) = (X ^T X) ⁻¹ X ^T D		
-20.939		
-8.376		
0.16		

- | |
|---|
| ①「行列 X の転置&逆行列 (X ^T X) ⁻¹ 」と
②「行列 X と前後差 D 値の転置行列 X ^T D」から求めます。 |
|---|

MMULT((X^TX)⁻¹の範囲、X^TD の範囲)

行と列を入れ替えた行列を転置行列といいX^TXと表します。エクセル関数は TRANSPOSE です。
 行列式を割り算して求める行列を逆行列といい(X^TX)⁻¹と表します。エクセル関数は MINVERSE です。

①行列 X の転置&逆行列(X^TX)⁻¹作成

MINVERSE(MMULT(TRANSPOSE(X の範囲)、X の範囲)

<Xの範囲>

最小二乗平均算出のための行列 X

x ₀	a	X _{ii}
1	0	148
1	0	144
1	0	146
1	0	163
1	0	159
1	0	157
1	0	155
1	0	165
1	0	177
1	0	156
1	1	184
1	1	166
1	1	139
1	1	158
1	1	148
1	1	174
1	1	151
1	1	167
1	1	165
1	1	154



(X^TX)⁻¹

β ₀ ̂	10.1020	0.1293	-0.0637
β ₁ ̂	0.1293	0.2053	-0.0015
β ₂ ̂	-0.0637	-0.0015	0.0004

②行列 X と前後差 D 値の転置行列 $X^T D$ 作成

MMULT(TRANSPOSE(X の範囲)、D の範囲)

<X の範囲>			<D の範囲>		$X^T D$	
最小二乗平均算出のための行列 X			前後差			
x_0	a	X_{ij}	D_{ij}			
1	0	148	10		β_0^{\wedge}	6
1	0	144	8		β_1^{\wedge}	-36
1	0	146	14		β_2^{\wedge}	1207
1	0	163	11			
1	0	159	1			
1	0	157	10			
1	0	155	-4			
1	0	165	-4			
1	0	177	-8			
1	0	156	4			
1	1	184	13			
1	1	166	-9			
1	1	139	-12			
1	1	158	-8			
1	1	148	-13			
1	1	174	2			
1	1	151	-6			
1	1	167	13			
1	1	165	-10			
1	1	154	-6			

③係数 (β^{\wedge}) を求める

MMULT($(X^T X)^{-1}$ の範囲、 $X^T D$ の範囲)

①と②で求めた値から算出します。

$(X^T X)^{-1}$ の範囲				$X^T D$ の範囲	係数 (β^{\wedge}) = $(X^T X)^{-1} X^T D$	
β_0^{\wedge}	10.1020	0.1293	-0.0637	6	-20.939	
β_1^{\wedge}	0.1293	0.2053	-0.0015	-36	-8.376	
β_2^{\wedge}	-0.0637	-0.0015	0.0004	1207	0.160	

手順3. 最小二乗平均を求める

表 4、表 5を再掲します。

MMULT(X の範囲、係数の範囲)=MMULT(AK9:AM9,AN9:AN11)

		<X の範囲>		<係数の範囲>	
		AK	AL	AM	AN
最小二乗平均算出のための行列 X					
	x	a	X値2群総平均	係数 (β^{\wedge})	
9	薬剤A	1	158.8	-20.9390	
10	薬剤B	1	158.8	-8.3760	
11				0.1600	

手順1. に順ずる



	最小二乗平均
薬剤A	4.49
薬剤B	-3.89

§ 3. 最小二乗平均の95%信頼区間を求める

95%信頼区間を算出するためには、標準誤差(SE)を求めなければなりません。
SEは $\sqrt{\text{分散 Var}(D)}$ なので、まず手順1で分散を求めます。

手順1. 前後差 D 値に対する分散 Var(D)を求める。

$$\text{Var}(D) = L \Sigma (\hat{\beta}) L^T$$

$$= [\text{行列 } X] \times [\text{共分散行列 } \Sigma(\hat{\beta})] \times [\text{デザイン転置行列 } X^T]$$

薬剤 A <行列 X> <共分散行列>

x	a	X値の2群総平均	共分散行列 $\Sigma(\hat{\beta}) = (X^T X)^{-1} \sigma^{2\wedge}$		
1	0	158.8	770.6164	9.8669	-4.8598
			9.8669	15.6578	-0.1114
			-4.8598	-0.1114	0.0310

§ 2 手順1に順ずる

① 共分散行列を求める。

ここで、新しく共分散行列 $\Sigma(\hat{\beta})$ が出てきました。

$$\Sigma(\hat{\beta}) = (X^T X)^{-1} \sigma^{2\wedge}$$

さらに、式には $\sigma^{2\wedge}$ も登場しています。

② 誤差分散の推定値 $\sigma^{2\wedge}$ を求める

$\sigma^{2\wedge}$ は誤差分散の推定値といって、残差平方和 Se/残差自由度から求めます。

残差自由度は表 3 の Se 自由度から求めます。今回は 17 となります。

③ 残差平方和 Se を求める。

$$Se = \varepsilon^{\wedge T} \varepsilon^{\wedge}$$

$$MMULT(TRANSPOSE(\varepsilon^{\wedge} \text{の範囲}), \varepsilon^{\wedge} \text{の範囲})$$

ε^{\wedge} は残差ベクトルといいます。

④ 残差ベクトル ε^{\wedge} を求める。

$$\varepsilon^{\wedge} = D - D^{\wedge} = (D \text{ の範囲} - D^{\wedge} \text{ の範囲})$$

D推定値 D^{\wedge} は $MMULT(\text{行列 } X \text{ の範囲}, \text{係数 } \hat{\beta} \text{ の範囲})$ で求める。

最小二乗平均算出のための行列 X

x_0	a	x_{ii}
1	0	148
1	0	144
1	0	146
1	0	163
1	0	159
1	0	157
1	0	155
1	0	165
1	0	177
1	0	156
1	1	184
1	1	166
1	1	139
1	1	158
1	1	148
1	1	174
1	1	151
1	1	167
1	1	165
1	1	154

係数 (β^\wedge)	
	-20.9389
	-8.3764
	0.1601



D^\wedge
2.8
2.1
2.4
5.2
4.5
4.2
3.9
5.5
7.4
4.0
0.1
-2.7
-7.1
-4.0
-5.6
-1.5
-5.1
-2.6
-2.9
-4.7

D_{ii}	D^\wedge
10	2.8
8	2.1
14	2.4
11	5.2
1	4.5
10	4.2
-4	3.9
-4	5.5
-8	7.4
4	4.0
13	0.1
-9	-2.7
-12	-7.1
-8	-4.0
-13	-5.6
2	-1.5
-6	-5.1
13	-2.6
-10	-2.9
-6	-4.7



ε^\wedge
$D-D^\wedge$
7.2
5.9
11.6
5.8
-3.5
5.8
-7.9
-9.5
-15.4
0.0
12.9
-6.3
-4.9
-4.0
-7.4
3.5
-0.9
15.6
-7.1
-1.3

<誤差平方和>

残差平方和 $Se = \varepsilon^\wedge{}^T \varepsilon^\wedge$

MMULT(TRANSPOSE(ε^\wedge の範囲), ε^\wedge の範囲)

1296.8

<誤差分散>

誤差分散(σ^{2^\wedge}) = $Se / \text{残差自由度}$

= $1296.8 / 17 = 76.3$

76.3

ようやく「共分散行列 $\Sigma(\beta^\wedge) = (X^T X)^{-1} \sigma^{2^\wedge}$ 」が仕上がりました。

共分散行列 $\Sigma(\beta^\wedge) = (X^T X)^{-1} \sigma^{2^\wedge}$		
770.616	9.867	-4.860
9.867	15.658	-0.111
-4.860	-0.111	0.031

手順2. ここで手順1に戻ります。

分散 $\text{Var}(D)$ を求める。 $\text{Var}(D) = L \Sigma(\beta^\wedge) L^T$

$\text{Var}(D) = \text{「行列 X」} \times \text{「共分散行列 } \Sigma(\beta^\wedge)\text{」} \times \text{「行列 X の転置行列 } X^T\text{」}$

薬剤 A

x	a	X値の2群総平均	共分散行列 $\Sigma(\hat{\beta}) = (X^T X)^{-1} \sigma^2$		
1	0	158.8	770.6164	9.8669	-4.8598
			9.8669	15.6578	-0.1114
			-4.8598	-0.1114	0.0310

手順1に順ずる

薬剤 B

x	a	X値の2群総平均	共分散行列 $\Sigma(\hat{\beta}) = (X^T X)^{-1} \sigma^2$		
1	1	158.8	770.6164	9.8669	-4.8598
			9.8669	15.6578	-0.1114
			-4.8598	-0.1114	0.0310

手順1に順ずる

	分散V
薬剤A =	7.7286
薬剤B =	7.7286

=MMULT(MMULT(行列 X の範囲、共分散行列の範囲),TRANSPOSE(行列 X の範囲))=7.7286

手順3. SE = ($\sqrt{\text{分散}}$)を求める

	SE
薬剤A =	2.7800
薬剤B =	2.7800

'=SQRT(分散)
'=SQRT(分散)

手順4. $t_{0.05}(\text{残差自由度}) \times \text{SE}$ を求める。 $t_{0.05}(17) = 2.10$

	$t_{0.05} \times \text{SE}$
薬剤A =	5.8654
薬剤B =	5.8654

=TINV(0.05,残差自由度)*SE
=TINV(0.05,残差自由度)*SE

手順5. 95%信頼区間 = 最小二乗平均 $\pm t_{0.05} \times \text{SE}$

	L95%	U95%
薬剤A =	-1.40	10.33
薬剤B =	-9.77	1.96

まとめ 前後差 D の最小二乗平均値と 95%信頼区間表

群名	最小二乗平均	95%信頼区間	
		下側95%	上側95%
薬剤A =	4.49	-1.40	10.33
薬剤B =	-3.89	-9.77	1.96

§ 4. 薬剤 A と薬剤 B の最小二乗平均の差の検定

手順1. 両群の差の分散の平方根 SE は回帰分析のダミー変数 a の推定値 $\hat{\beta}_1$ であることから

共分散行列の分散 15.658 から $\sqrt{\quad}$ して標準誤差 SE=3.957 を得る。

	共分散行列 $\Sigma(\hat{\beta})=(X^T X)^{-1} \sigma^2$		
$\hat{\beta}_0$	770.616	9.867	-4.860
$\hat{\beta}_1$	9.867	15.658	-0.111
$\hat{\beta}_2$	-4.860	-0.111	0.031

手順2. 最小二乗平均の差 = 4.49 - (-3.89) = 8.376

手順3. t値 = 最小二乗平均の差 / SE = 8.376 / 3.957 = 2.117

手順4. p値 = p値 = T.DIST.2T(t値, 残差自由度) = T.DIST.2T(2.117, 17) = 0.0493

				95%信頼区間		
	最小二乗平均	標準誤差	t値	下限	上限	p値
薬剤A,B差	8.376	3.957	2.117	0.027	16.725	0.049

結果: 薬剤 A と薬剤 B の最小二乗平均の差は p=0.0493 で有意差がみられる。

以上のように、行列計算を駆使してようやく、添付文書に書かれていた変化量の最小二乗平均とその 95%信頼区間および群間のp値を求めることができました。最小二乗平均がほとんどの教科書に取り上げられていないことも、その解析手順の複雑さによっているのかもしれませんが。なお、実践で最小二乗平均を使うにはJMPソフトを使用することをお勧めします。

注) 行列式は、厳密には、determinant | 正方行列 | を意味します。Excel では、=MDETERM() 関数を使います。行列を使った計算は、matrix algebra 行列代数 と言いますが、ここでは、行列を行列計算 または行列計算式 とすることを推奨します(高橋行雄コメント)。

謝辞: 行列計算については、高橋行雄氏にご指導を受けました。また、本メモについても査読をお願いして大事な注も入れていただきました。御礼申し上げます。

以上

- 1) 高橋行雄「最尤法によるポアソン回帰分析入門」カクワークス社
- 2) Pharmaco Basic Ver.17 Pharmaco 工房 (<https://pharmaco.club/>)